# 遠近新聞

第廿六號

定價一匁

西垣文庫
特
文庫10
7265
24

特文庫10
7265
24

早稲田大學圖書

遠近新聞第二十六号　慶應四年五月廿九日

日光奉行新庄右近将監事ハ不審の廉ありて江戸ゟ送り某藩へ預けの処ハ不審のかどお晴き去る十九日ハ渡しゟお成り翌廿日若年寄平岡丹波守殿宅ゟ於てハ役ハ免諼慎の儀在旨ニ仰渡ハ

○

兵庫の交易も盛なれども大坂の交易ハ一層盛なる

○



西園文庫
5935

去る十五日上野に掃撃の節本庄深川辺の壮士等数多神保某の邸に馳集り速に兵を整へ出張すべしと言けるに某い元より恭順一図の人なるが故に其儀然るべくと理解せず壮士等何分承引せず祖宗神廟に此の如き異変あるを臣子の分として坐視すべきやと某曰く神廟の異変我亦悲歎に堪へず然るに官兵厳重なれば恐らく我黨の通行を許さざらん衆士奮然として曰く我輩義によりて行ふ所あるを若し支吾する者あらば相手を撰まず打破りて通るべしと辞色共厲しかりければ某亦重ねて宥



むるに辞あり〻さらば其意に同ずべし諸君まづ其支度あるべしとて坐を立ちけるが竊に家来に命じ門外に空砲二三発を打らせ夫れ官軍が推寄せらるぞと高声に唱へられば並居らし諸士愕然仰天取るものも取りあへず左往左往に逃げ走り某其体を見て大に歎息し頓て官軍に非ざるよしを詐傳へて再び諸士を集めて大に誡しめ右様の不覚悟にて神廟の警衛思ひもよらず宜しく自宅に謹慎して事定まるまでは妄に外出せざるべしと云ければ流石の諸士も一言なくして皆狐鼠々々と退散せ

りかゝるとて所の神保氏の屋敷に多人数屯集せるよ
し官軍方に其聞へありてまづ真様一隊の兵をつか
はし其屋敷を囲ましに某自身に出迎ひ官軍の隊長
に面接して曰く今朝少年の族一両輩拙宅に来り越し
ていへらく某其不心得の段を誡めて先刻立ぬよ
悉く退散仕りたれ猶ほ不審いなれば宅内市吟味を蒙
らんやとかける所隊長いづれも屯集の所と覚し
ければ放火に及ぶべしと有りけるに某其儀はいづ
官兵を労し奉るに及ぶに某速に自焼の仕ようと
言ひつゝ直に家来を走らせ其官軍の市焼打ある



ぞ速に通げ去り狼狽て怪我せるなと呼ばりたりけ
まづ近隣一時に騒擾し火急とりひ雨中とりひ老幼
男女の泣きさけび逃げ走る有様心ある者とりへど
見るに忍びぬ官軍稍姑く此体を見て居たりしかや
がて不審やとて遠くより某隊長の指図にて最早放火
に及ぶとて隊伍を枚めて引取りたるされば神保
某は少年の過激をあざむき官軍の怒りをも和らげ自
宅のみならず近隣の家々まで兵火の禍ひを免れ
事は全く平生の心掛厚く誠の武道を嗜みある人な
るゆと其ひとりの人の取々噂せるを聞き是ぞ此頃

すてゝの美談ありと其有様を吹聽せるを聞くのり

○上田飛脚の咄

上田多人数越後長岡辺まで進入りゐ処上田勢へ使者を以て是迄同盟いたし得ども名義の正しきに随ひ以来會へ組しゐ間此段は断りや速やかに否長岡勢より炮發いたし上田勢不意をうゝ討死手負人有之より炮術家八木頂藏も其せろ討死のよし

○因州より達の写

今度江戸脱走の賊徒及び會賊等野州表所々屯集い



たる其勢ひ甚ぶ猖獗の処其藩人数速に馳向ひ與諸藩合謀悉く力屢及奮戰賊徒悉く敗散国内遂に令鎮静ゐ條神妙の至感入ゐ尚此上勉励可抽忠戰ゐ事

東山道先鋒総督

同　副総督

閏四月

○廿三日板橋より来りし人の話

昨日板橋より南の方に當りて大炮の音頻りに聞へ今朝ハ川越辺に戰争の招来すと炮声せるよ聞へ

○

此せろ越後国山中より毀〻金銀を堀り出し會津
〻金銀銭三座を取り立事ら吹立有之ハ〻

右越後国金山ハ會津領よ成りハ〻

○

そよふく風第二号よ去る六日筋違御門橋東側擱干
よ結び付有之ハ梟首の図并よ捨札を載せり右ハ竹
橋内炮兵頭河津三郎太郎組の者三人ハ仕着せの白
き羽織を着し通行せしハ処神田竪大工町木戸番人
紋兵衛の妻之を見て笑ひ譏りし由〻て右三人自身
番よおゝ〻紋兵衛をお咎めハ其内筋違ハ門ハ固め



溝口候ハ人数ハお願ひハ哉右ハ人数駈けつけ其内
一人を捕へ首を斬り晒せし〻右よ舟炮兵方より
掛合有之依之右ハ固めハ免よお成りハとり〻

○廿四日ハ達の写

明廿五日四ツ時布衣以上以下一役一人づゝ田安殿
ハ屋形ハ出ハ招ハ達ハ事
但深帽子麻上下着用之事

五月

○

脱走兵西より来り箱根の関所を撃破り小田原よ下

きりと言ひ又去る廿二日馬入川を挾みて戰爭なりしと云ふ噂あり

○

新聞紙の主意い確説を告知るよりされど互ひよ速あるを競へば傳聞の誤を免れ勿論本号出板の後確報あれば必ず其誤を正して次号に載せと亟元来傳聞のまゝ之を誌し敢て私意を加へざるゆ故に確報を得ざれば之を改るを能はず省官確證有りて謬誤を知り賜へば遠近新聞社中にも認め書林又い繪草紙屋まで投ゝ下はゝ幸甚